

## 坂田郡近江町顔戸日撫山古墳測量調査報告

粕渕 貢、泉 朝美

はじめに

日撫山（朝妻山）は、古代朝妻港（天野川河口）から見ると、秀麗な神奈備山として美しい姿を望むことができる。この山麓には人塚山・塚の越・山津照神社などの古墳が知られているが、山頂や山稜にはこれまでその存在が知られていなかった。然し最近の近江町に於ける分布調査では、朝妻山山頂から一ノ城の山頂にかけての鞍部に古墳らしいものが存在することが予想された。このため私たちはその実態を究明するため、古墳調査の忘れられた原点ともいえる墳丘測量調査を実施したのである。

### 調査の成果

はじめにも述べたように、日撫山の山頂から北東へ延びる稜線上の鞍部には大小二つの地形の起伏が認められ、北西側のものは（最も低くなった鞍部よりのもの）は、自然地形の起伏にすぎず古墳とはなしがたいものであった。然しこの小さな高まりの東側稜線まじかの斜面には岩座ではないかと思われる巨石が峻立している。

ここで測量した古墳は、この巨石のさらに南西側の稜線上に位置する古墳である。朝妻山頂から古墳までの間はおおよそ120mをへだて、山麓部の院内から一ノ城に至る山道が稜線に達した個所から古墳までは北東へおおよそ60mにすぎない。古墳は海拔おおよそ206mである。

この稜線上からは、竹生島や山本山が手にと

るように望むことができる景勝の地である。然し近江町南部の平野部は朝妻山山頂にさえぎられ望むことは不可能であるが、高溝の縄文時代以来の拠点集落を眼下真近に望むことができる。

古墳は尾根筋に沿った長辺およそ15m短辺およそ13mのやや長方形を呈する方墳である。北東短辺は山道により比高差1m弱であるが、この部分の山道を除去して考えた場合、墳丘の裾部を画する一条の空堀が埋没しているものと考えられ、この場合の墳丘比高差は1.5mを予想することが可能であろう。この短辺の南北の隅部は、その稜がやや流れているとはいえ明瞭なものが感じられる。また北側長辺では巾1m弱のフラット面が形成されており、或いは墳丘のすそ部かとも思われる。また南長辺では、墳頂からマイナス1m強の部分で山稜側面の角度が変わることから或いはこの部分が古墳のすそではなかったかとも思われる。しかし確証はない。この場合の古墳の短辺の長さはわずか9mである。南西短辺はやはり盛り上がった山道によって観察を難しくしているが、その左右では明瞭な裾部が観察される。特に南西コーナーは、遺存状態がすぐれている。ただ、山道の左右で裾部の位置はすこし双方にずれがみうけられることが気になるところである。然し北西すみ部が墳丘もふくめてかなり流失していることから、このような違いが観察されるものとも思われる。この部分での墳丘比高差は2mを測るものである。地形の雰囲気からみてこの短辺すそ部にも一条の空堀が埋没していることが予想されよう。墳丘には葺石や埴輪は認められずその内部主体も横穴式石室ではなく、木棺直葬や簡単な粘土槨を予想することが許されよう。その年代も六世紀中葉を下るものではありえない。現在近江町で判明する最古の古墳とすることができる。

むすびにかえて

以上測量調査の成果にうかがわれたように、当古墳は従来知られなかった日撫山山稜上の唯一の古墳であることが判明した。またその墳形も方墳という特異な形をとるばかりか尾根筋に沿った長方形墳を示すことに注目される。この古墳が何時築かれたものか残念ながら現在不明であるが、新しい時代のものでないことは充分予想される。また、湖北北部から北陸にかけて同様な長方形墳がしばしばみうけられ、それらの年代が四・五世紀にさかのぼるものであることはよく知られた事実である。近江町の古墳文化の究明は今日その緒についたばかりのものであり、今後町内の詳細な古墳の分布調査を行い、地道な墳丘測量調査などが果たされることによって、息長氏の故里がより具体的に明らかにされることであろう。

#### 記

この古墳測量は1986年9月11日、丸山竜平氏の

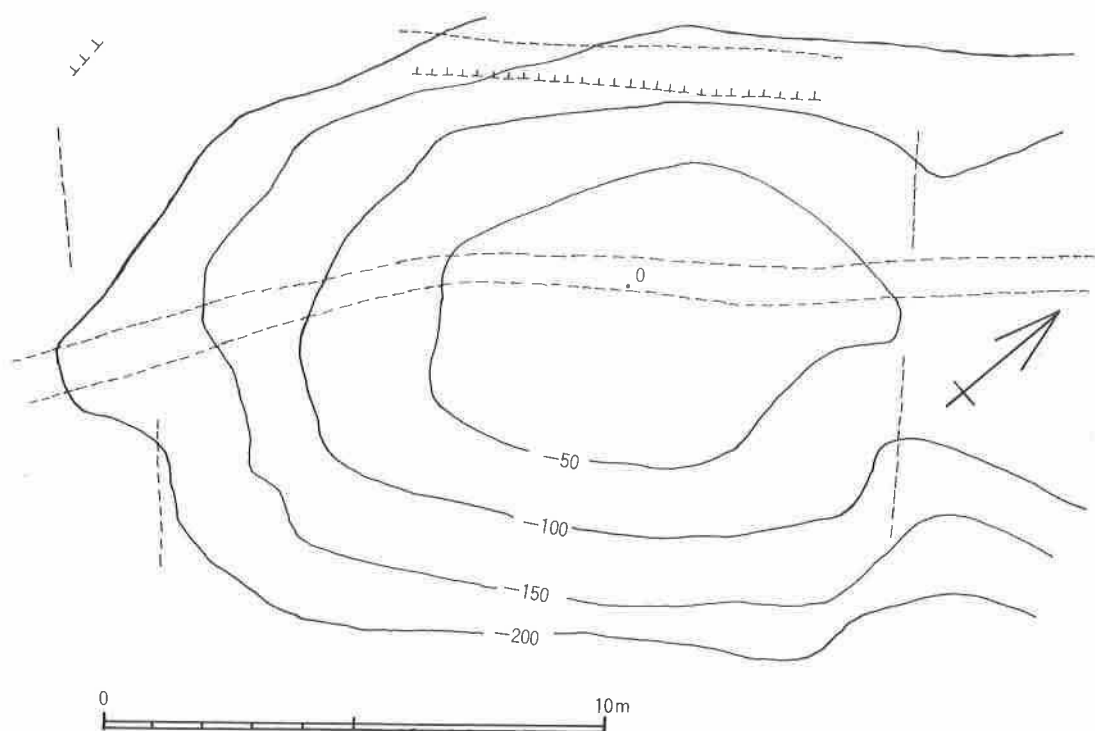
指導により、粕渕貢・村岡勝次・泉朝美・粕渕信・須戸源隆の面々がたずさわったものである。ここに末筆ながら関係諸氏に感謝の意を述べたい。



日撫山古墳遠景（北西から）



日撫山古墳近景（北東から）



日撫山古墳墳丘測量図